シン・地方人 往来人

本と地方が教えてくれた「待つ」ということ

夏葉社代表 島田 潤一郎

就寝時間中は必ず30分読書の時間を設けている

取材を終え事務所を出ると、小学生の一群が通り過ぎた。体をお互いぶつけ合いながら帰宅を急いでいた。吉祥寺駅から徒歩十数分、大通りに面したマンションの一室に事務所はある。島田潤一郎さん(46)がひとりで編集、営業、発送を担う夏葉社。社名の「夏」に「葉」は、ふるさとの高知県室戸市で過ごした日々から取った。「若い人を僕は信頼したい。希望なのですから」。そう教えてくれたのも街の本屋だった。

2023年12月に『本屋で待つ』を刊行した。著者は広島県庄原市の書店「ウィー東城店」の佐藤友則さん。佐藤さんの話を2年にわたり聞いたことを島田さんがまとめた。聞き取りは4回、計8時間に及んだ。同店は、美容院やエステ、コインランドリー、パン屋などを併設したユニークな本屋さんだ。島田さんには、新聞の書評欄でも相次ぎ紹介されたこの本をもとに、街の本屋の可能性や地方について語ってほしい、そして、書名にある「待つ」とは何だろうかと取材依頼の中で問いを投げた。

待てない、佐藤さんだって僕だって

「何でも屋としての本屋さん、佐藤さんのことはもちろん知っていましたし業界でも有名でした。でもそれだけだったら、本を作ろうと思わなかったですね。僕が引かれたのは引きこもりの子を雇うことを佐藤さんが始めてから。すごく興味があってオファーを出しました」

本の中で佐藤さんは言う。「待つということは聴くこととよく似ています。待てない人はおそらく人の話(心の奥底の想いを聴けていない)。一歩が踏み出せない子どもたちが街の本屋で、時間をかけて変わっていく姿に心を動かされる。」

島田さんは続ける。「普通待てないですよね。僕もそうですし。佐藤さんも元々すごくせっかちなので、考えるよりは体が先に動くようなタイプの人でした。それが、佐藤さん自身も変わっていく。引きこもりの子どもが自分から話したり行動したりするまで待つようになる。待つということは何だろうかと。意志を持って待っている『ような感じがしました。つい動きたくなるけど我慢しよう。待つということに今、価値を見出していきたい、そこに何かヒントがあるんじゃないかと思っています」

島田さんは少し間を置いて言う。「いきなり本質的なことを話すと、やっぱり一人だから待てるんだと思います」。組織と個人は違う。企業が商品を作ってリリースすれば、1週間、1カ月の間に結果が出なければ失敗と言われてしまう。「いい本を作ったと確信すれば、締め切りを設けずじっと待てばいい。10年、30年、僕が亡くなった後にでも必要な読者に届けばいいんです。それには待つ勇気というか我慢しなければいけません。それでも自分一人で仕事をしていると、どうしても結果が早く欲しくなってしまうこともあります。現代はSNSの時代ですので、Twitterで今日も誰も話題にしてくれないと落ち込みますし、こらえ性がなくなって、イベントをやってみようか、何が動いて